



兵庫県立但馬やまびこの郷

虹のかけ橋

Web版／平成31年2月

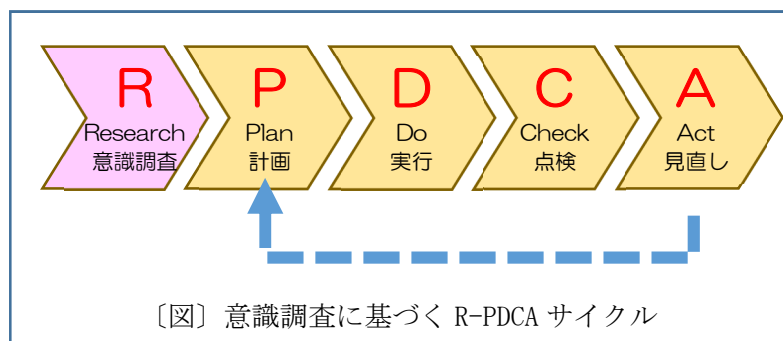
<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

国立教育政策研究所の「魅力ある学校づくり調査研究事業」（平成 26～27 年度）において、「指定地域の学校で PDCA サイクルを年 3 回（2 年間）実施した結果、約 20%の不登校数を減少させることができた」との報告がありました。『不登校の未然防止』において、今回は「PDCA サイクル」の取組について紹介します。

意識調査(R= Research)に基づく R-PDCA サイクル

R-PDCA サイクルとは

現在、教育活動において、既に PDCA サイクルを活用している学校も多いと思います。PDCA サイクルでは、まず計画を立ててから実行していくわけですが、文字通りの



〔図〕 意識調査に基づく R-PDCA サイクル

順で、いきなり「計画 (P=Plan)」から始めてしまうと、実行前のデータがないために、「実行 (D=Do)」した後の「点検 (C=Check)」と「見直し (A=Act)」を適切に行うことが困難になってしまいます。また、児童生徒が期待通りの変容に至っているのかを検証することもできません。計画立案に先立って、客観的な指標で実態把握を行っておくことが必要です。

そこで、図のように、前段階で児童生徒の意識調査 (R=Research) を行い、それを基に計画を立てて実行することを提案します。こうすることで、児童生徒の実態やニーズに合った計画を立てることが可能となります。

ディスカッションが、同僚性や協働性を高める！

意識調査をもとにして、教職員全員が「ディスカッション」することにより、課題が共有され、共通の目標を持つことができます。全ての教職員が方向性を揃えて日々の実践に取り組むことは、同僚性や協働性につながり、学校がチームとして機能していきます。不登校児童生徒の未然防止に必要な「絆づくり」は、児童生徒はもとより教職員にも大切なことなのではないでしょうか。

不登校に関する研修会

平成 29 年度の兵庫県における不登校児童生徒数は、小学校で 1,490 人（前年度比 379 人増）、中学校で 4,979 人（前年度比 559 人増）と増加傾向にあります。不登校の要因や状態も多様化・重層化し、引き続き早期に発見、対応すべき課題の一つとなっています。

そこで、当所では教職員及び適応指導教室担当者等を対象に年 5 回の研修会を開き、こうした課題への対応について理解を深めるとともに、実践的指導力の向上を図っています。

講義の概要と受講者の感想

第 1 回 7 月 31 日（火） 姫路市市民会館

テーマ：「不登校の子とその家族への支援」

講師：ヴィヒャルト 千佳こ（鶴が峰心理グループ代表）



家庭環境の変化、ネット依存、発達障害、愛着障害、レジリエンスの低下等、不登校には様々な要因がある。

その子の将来をイメージしてゴールを設定し、個に応じた学習支援、居場所の確保、自尊感情の補強、生活習慣の改善などが必要である。また、保護者にも寄り添い、共感することが大切である。

<受講者からの感想>

- ・ 実例をたくさん教えていただき今後の参考になった。
- ・ 不登校の子の背景にある問題がよく分かった。
- ・ 毎日手探り状態の不登校支援の答えをいただいた気がした。
- ・ 家庭訪問を行う際の具体的な対応がよく分かった。

第 2 回 8 月 2 日（木） 県立丹波の森公苑

テーマ：「不登校の子どもの願いと保護者・教職員の役割
～つながって生きるために～」

講師：春日井 敏之（立命館大学大学院教職研究科教授）



子どもを助けながら実はこちらも助けられている…、教師はこのことを自分の言葉で子どもに伝え、敬意を払うことが大切である。

内閣府（2010）の調査によると、ひきこもりになったきっかけの計 44%が「就職活動のつまずき」と「就職した職場になじめなかった」であった。失敗を乗り越える力を育てるには、小中高校で失敗を経験させることも必要である。その際、失敗しても排除されない練習付きの学級、学校づくりが大切である。また、「チーム学校」が機能するためには、学校長のリーダーシップと教職員、専門機関との連携が大切であるが、チームのメンバーには子どもたちも入っていることを忘れてはならない。わからないことは子どもに聴くことである。

<受講者からの感想>

- ・子どもたちの感覚や、私たちが教師としてかかわり、支援する視点がよく分かった。
- ・不登校対応だけでなく、学級づくりの上でのヒントも多くいただいた。
- ・双方向のコミュニケーションの大切さが理解できた。
- ・子どもや保護者と向き合うときに、どのようなことに気をつけなければならないのか考えさせられた。

第3回 8月28日(火) 県立嬉野台生涯教育センター

テーマ：「発達障害のある子に対する理解と支援」

講師：根来 秀樹(奈良教育大学教授、児童精神科医)



不登校の要因は生物学的要因(子ども自身が持つ要因)、社会的要因(学校や家庭環境)、心理的要因(不安、自尊感情の低下、失敗体験など)を総合して理解していかなければならない。

発達障害がある子どもにおける思春期の課題として、「自尊感情の低下」や「思春期の変化にうまく対応できない」などがある。思春期までに「自分が必要とされる有能な人間である」という自己イメージを持たせることが必要である。

<受講者からの感想>

- ・ASDに関して医学的な知見だけでなく、子どもや親へのかかわり方も教えていただき大変参考になった。
- ・それぞれの症例にあった支援の方法がとてもよく分かった。
- ・子どもの「困りごと」をどうみたてるかについて、常に3つの側面から見ていくという点が大変わかりやすく参考になった。
- ・思春期から不登校・不登校傾向になる子どもたちへどう接していけばいいのか手がかりがつかめた。

第4回 10月22日(月) 県立総合体育館

テーマ：「学級という『機』を織る

～教室でできる気になる子への支援～

講師：曾山 和彦(名城大学教授)



教室でできる特別支援教育の基本は、気になる子だけを支援するのではなく、教室にいる全員の子を育てること。学級づくりをしっかりと行い、教室を子どもたちの居場所にすれば、現在の教育の課題は解決する。

学級でのふれあいづくりは「縦糸(教師と子どもを結ぶ糸)」と「横糸(子ども同士を結ぶ糸)」を織り上げることである。

<受講者からの感想>

- ・教えていただいた2本のアンテナ、アイメッセージを大切にしていきたい。
- ・SSTなど学校全体が変わるためのヒントをいただけた。
- ・アドジャンは、今週からでもやっていきたい。
- ・理論と実践が簡潔明瞭で非常に分かりやすく、誰でもすぐに実践できると思った。

第5回 11月19日（月） 洲本市文化体育館

テーマ：「学級における絆づくり

～グループアプローチによる人間関係づくり～

講師：長谷川 重和（神戸親和女子大学教授）



不登校の支援では、過去の状況だけを支援の判断材料にするのではなく、現状を把握し、将来に向けて「今できることは何か」を考えていくことが大切（here and now）。そして、教師は、個と集団を両輪で動かし、個の関係を集団の関係に持っていくことが大事。

グループアプローチは、活動のねらいを明確にして計画的に取り組み、「大事なことは何か」がブレないようにしてほしい。

<受講者からの感想>

- ・子どもへの様々なアプローチの方法を知ることができた。
- ・学級における人間関係づくりについて、具体例を示しながら教えていただけた。
- ・実際に活動を体験することで、誰でも安心できる居場所づくりの大切さを実感した。
- ・グループアプローチを行う意図について、演習を交えながら楽しく学ぶことができた。

※ 各回の講演記録は、当所ホームページをご覧ください。

演習の概要と受講者の感想

第1・3回演習「学校におけるソーシャル・スキル・トレーニング

～人とのかわりやともに生きるルールを学ぶ～

第1・3回研修会では、ソーシャル・スキル・トレーニングの演習をしました。「怒りのコントロール」や「困っているときのお願いの仕方」など、ロールプレイを交えながら実践的な演習に取り組みました。



<受講者からの感想>

- ・楽しく話しやすい雰囲気の中で演習に取り組めた。不登校生徒への支援に活用していきたい。
- ・実践ですぐに活用でき、不登校の生徒の気持ちを考えられる内容だった。
- ・SSTについて学びたいと思っており、今回大変良い機会となった。子どもたち同士がつながる学習について今後取り組んでいきたいと思った。
- ・班のメンバーの様々な子どもへのアドバイスの仕方を聞くことができた。

第2・4回演習「ピア・サポートによる学校・学級づくり

～子どもたちが互いに思いやり、助け合い、支え合う人間関係づくり～

第2・4回研修会では、ピア・サポートの演習をしました。ピア・サポートとは、「相互の人間関係を豊かにするための学習の場を各学校の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキル（技術）をもとに、仲間を思いやり、支える実践活動」のことです。今回は「相手の気持ちを聴き取る」「対立の解消」などの演習に取り組みました。



<受講者からの感想>

- ・子ども自身が自分で考えて解決できるよう、今後、ピア・サポートを活用したい。
- ・普段の話の聞き方や解決の仕方を再確認できた。
- ・様々な演習を通して、相手のことを知ったり気持ちを押し量ったりする手法を体験することができた。
- ・「話をする」「聞いてもらう」という機会と質が低下している中で、このような技術を子どもたちに伝え、使っていけるようになれば良いと思う。

第5回演習「初期対応についての事例演習

～子どもの心の声をキャッチできていますか？～

第5回研修会では、初期対応についての事例演習をしました。今回は、「不登校児童生徒の担任になったとき、最初にすること」「急に登校しなくなったときの対応」などの事例演習に取り組みました。



<受講者からの感想>

- ・「心配している」ということが本人に伝われば、心を揺さぶることができると感じた。
- ・ロールプレイでは、不登校の子どもの気持ちが実感できた。今後、子どものつらい気持ちを少しでも軽減できるように努力したい。
- ・ロールプレイで不登校生徒の役を演じながら、「こういうことを聞いてほしい」「これは言ってほしくない」など追体験することができた。
- ・どの学校でも起こり得る実践的な内容だった。経験をもとにした多くの先生方の意見を聞くことができ参考になった。

兵庫県立但馬やまびこの郷機関紙「虹のかけ橋」Web版 平成31年2月
発行／兵庫県立但馬やまびこの郷
〒669-5135 兵庫県朝来市山東町森字向山 45-101
TEL(079)676-4724 FAX 079-676-4721
URL <http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

